

内裏北外郭北方の調査

－ 第339次

はじめに 個人住宅改築にともなう事前調査である。調査地は奈良市佐紀町2492-3に所在し、内裏北外郭の北方に位置する。また岸本直文の復元によれば、市庭古墳前方部西側の墳丘基底部にあたっている（「市庭古墳の復元」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎 1995）。

本調査では、奈良時代における内裏北方の状況、および市庭古墳前方部の推定基底ラインの妥当性を検証することを主目的に発掘調査を実施した。調査区は南北6.5m、東西2.5m。調査面積は16.25㎡。調査期間は2001年11月15日から19日である。

基本層序 現地表面から、表土、橙白色粘土ブロック混明茶褐色土（近代の造成盛土）、暗灰色粘質土（耕土）、礫混明灰色粘質土、橙黄色粘土（地山）となる。現地表面は標高74.6m～74.7m。

遺構検出は礫混明灰色粘質土層上面（標高74.2m～74.3m）で行い、最終的に地山面で確認した。なお、標高74.1m～74.2mで地山面に達している。

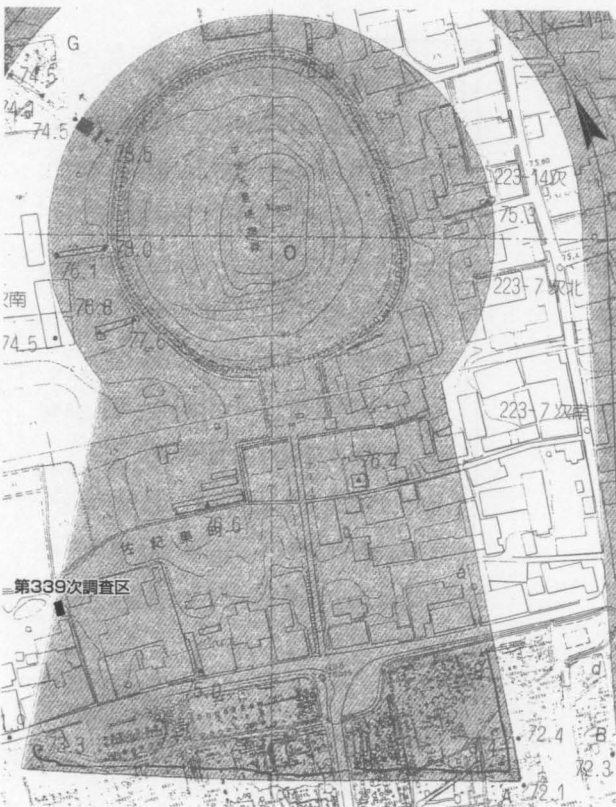


図93 第339次調査区位置図 1:2500 (岸本1995に加筆)

検出遺構 検出した遺構は土坑7基である。大部分は調査区外に延び、遺物も微量であったため、その性格・時期を特定することは困難である。

調査区の北西隅部で検出したSK18345は、その底に拳大の礫が多数敷き詰められていたこと、埋土から円筒埴輪片2点が出土したこと、この場所が前方部の推定基底ラインに位置することなどから、市庭古墳に関わる遺構の可能性が一時考えられた。しかし、SK18345からは近世の瓦質土器も出土しており、古墳に直接関わる遺構とみることは慎重であるべきであろう。

本調査では、奈良時代の官衙をはじめとする顕著な遺構を検出することはできなかった。だが、標高74.1m～74.2mで地山面を確認できた意義は大きい。本調査地の南西約50mに位置する第215-13次調査では、古墳周濠の基底部が標高71.9mという知見を得ており、両者の比高差から、今回の調査区の大部分が墳丘範囲にあたるのが明らかとなったためである。これは岸本の推定をほぼ裏づけるものである。とはいえ、市庭古墳前方部西側の基底ラインを明確に示すデータはいまだ検出されておらず、今後の調査を期待したい。 (市 大樹)

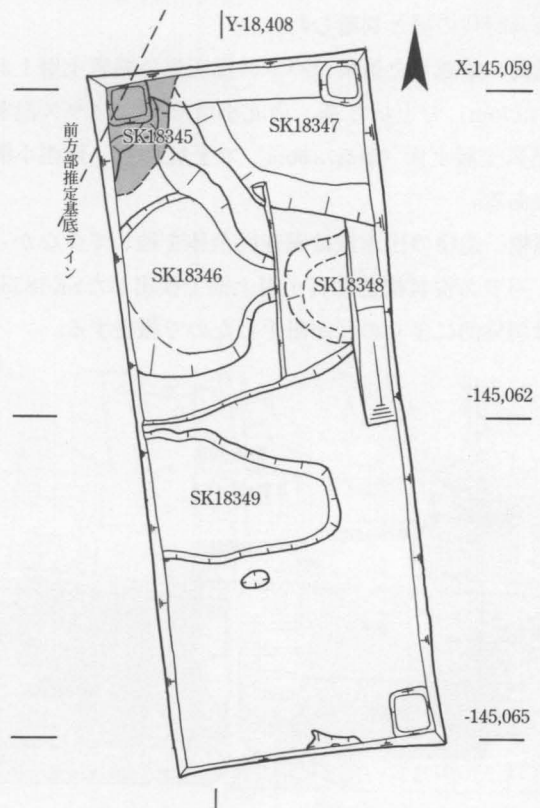


図94 第339次調査遺構平面図 1:70